

チャレンジセンターにおける集い力の教育について

実施報告

日時: 2014年9月3日(水) 14:00 ~ 15:30

場所: 東海大学湘南キャンパス 8号館3階プロジェクト会議室

参加者: チャレンジセンター教員: 7名 チャレンジセンター推進室職員: 3名

1. 【発表1】集い力(入門)における取組と教育内容について

園田由紀子

集い力(入門)では、チャレンジセンター科目の導入科目として履修する学生が多い傾向がみられ、その中で、チャレンジセンター科目が楽勝科目ではない、努力と実践が重要であること、社会的実践力を身につける重要性についてガイダンスを中心に指導している。科目の内容としては、コミュニケーションとはどのようなものか理論的に説明した後、非言語コミュニケーションを中心に表現の傾向や意味解釈について説明している。さらに、聞くスキル、伝えるスキルなどの技法を演習を交えながら教え、グループでの実践を行い、多人数でも取り組めるシミュレーション型の演習を用い、試行している。ルーブリックは、教育目標の提示として、ガイダンス時、自己成長の確認のため事後にそれぞれ自己評価をさせているが、これを成績評価には用いず、関連する内容を期末テストで実施していることが説明された。資料を使って、学生からの反応なども示されたが、学生に対し、多くの課題を実施し、採点返却を行うことでより学習意欲の喚起を図っているが、負荷が大きく、授業運営上の問題とされた。集い力(入門)では、コミュニケーションを理解し、基礎的なスキルを学んだ後、演習で試行させるという位置づけで授業を行っている旨報告があった。



2. 【発表2】集い力(演習)における取組と教育内容について

田島 祥

集い力(演習A)では、メディアを使ったコミュニケーションの特性を学んだ後、学生に自身の日頃のコミュニケーションを振り返らせ、チャンネルによる影響や匿名性との関係を考えさせた。その上で、メディアを使ったコミュニケーションにおける問題について、グループでブレインストーミングを行い、ジグソー学習の手法を使って、役割ごとの情報整理の過程を経て、学生に選択させた項目についての学習教材を作成させるという演習を行った。特に効果的だったのは、KJ法の手法を用い、情報を整理させる作業の中で、具体的な情報の把握や共有の重要性を理解させられた点とジグソー学習を用い、グループ内での役割獲得を意識させることで、集団的作業の効率や個人のチームへの関わり方を学習できる内容とした。グループワークに入る際は、自己紹介を総当たりで行わせ、チームでの円滑なコミュニケーションを促すことやその際、「共通点」という関係構築上有効な視点の獲得を意識して演習を組み立てた。これにより、グループ作業が円滑に行われていた。さらに、授業の中で見られた課題としては、グループ活動の中で、責任感やモラルが欠如した一部の学生の欠席等の問題行動が大きく影響した部分も見られ、グループ活動に対する意識レベルの教育の必要性が指摘された。さらには、パワーポイントの作成など、一部PC教室を利用した授業内容としたため、PC操作能力の差により、学生の作業量に格差が生じ、課題の成果に影響が見られるなどしたことが報告された。



3. 【ディスカッション】

ファシリテーター 堀本麻由子

2つの発表を受け、どのような点について議論をしたいのか、疑問やコメントを、参加者全員に紙に書いてもらい、それらをファシリテーターがまとめ、議題を確認しながら、参加者に意見を求める形で、ディスカッションを進めた。出されたコメントには、「入門」科目と「演習」科目の位置づけや教育内容について、集い力の目的、教育方法、学生のモチベーションや責任感の問題、ルーブリックの活用など、多くの意見が挙げられた。集い力では、総合的なコミュニケーション能力の育成等の抽象的な言葉で指し示されることから、具体的にどのようなことを教育すべきかについて意見が出されたが、積極的に働きかける能力や見知らぬ学生同士の集団的コミュニケーション能力、リーダーシップなどの必要性が挙げられた。さらに、入門科目と演習科目の位置づけについては、従来通り、入門科目には講義を中心とし、演習科目は、グループによる演習を中心とすることが確認されたが、方法が異なるとしても、学ぶべき内容の整合性については非常に難しい問題であり、継続的な議論の必要性が認識できた。さらに、入門科目では、理論等の知識を学び、それを試行する段階とし、演習は、これらについて実践する力を養うという位置付けではないかという意見が出さ



れた。加えて、演習の最中に突然連絡もなく欠席する、発表の資料を持ったままいなくなるなど、授業内でのグループ活動に置いて、メンバーとしての責任を果たさない学生も問題が挙げられ、「集い力」という力の中に、チームに対する所属意識、チーム意識を積極的に意識できる力という新たな視点が見出された。授業では、ランダムに作られた演習用チームに対して、どれだけ所属意識、チーム意識を持ち、チームに貢献できるメンバーとして活動できるかを体験させ、プロジェクトではさらに、チームに対し積極的に貢献する高いチーム意識を実践するといった位置づけが見えてきた。このように、多くの意見が出され、活発な議論が行われたが、今回の研修では、何か正解を見つけるといった段階ではなく、教職員相互の集い力に対する理解や課題の共有が一つの目的となっており、効果的なファシリテーションによって、これらの目標は達成できたと思われる。

4.【研修を振り返って】

チャレンジセンター次長 崔 一煥

これまで行ってきた「集い力」の授業について、改めて振り返ることで、他の教員と問題を共有でき、今後の授業に活かせる点、参考になる点を見つけられ、このような研修もたまには有意義であると感じた。さらに、センター内の教職員のみで議論を行うことで、率直な意見も多く見られ、センター内での研修としての意味があったのではないかとと思われる。今後も、「挑み力」「成し遂げ力」とそれぞれの科目ごとに、教育の内容を振り返る機会を作ることは、よい研修となるのではないかと思った。